

はしがき

本書の源は、昭和三十二年発行の『要説文語文法』です。その後数度にわたって改訂を加え、広く愛用されてきました。が、文語文法を学ぶ高校生諸君にわかりやすく使いやすいものとなるように、この度抜本的な見直しを行い、『新・要説文語文法 五訂新版』を発行する運びとなりました。

今改訂では、内容を正確に、わかりやすく、コンパクトに提示するために、学習内容の整理と併せて図解・表覧・コラム・簡条書きを増やし、視覚面でも理解へのいっそうの便を図りました。

本書の特色は、次のとおりです。

- 1 各文法項目は見開き二ページないしは一ページ内にまとめられた。
- 2 上段では文語文法の概要を述べ、コラムや下段ではその補足事項を述べた。また、補足内容の種類ごとに以下のよう整理して示し、注意を喚起した。
 - PLUS 発展した事項や補足事項を詳しく解説した。
 - 基礎を押さえよう 各章の学習ポイントを簡潔に示した。
 - ここに注意 各学習事項で誤りやすい点、見落としがちな点などの注意事項を示した。
 - ポイント詳し〜 さらに踏み込んだ事柄を端的に示した。
 - 識別のコツ〜 助動詞を中心に語の文法的な識別法を解説した。
- 3 解説は、平易・懇切であるように努め、自学自習も十分可能なものにした。
- 4 例文は短くて平易なものとし、該当する語は太字・色刷りで示し、一目で把握できるようにした。例文には全て古文に忠実な口語訳（下段・色刷り）を付し、古文と訳文の対応がわかるようにした。
- 5 理解の定着を図るために**確認問題**（**確認**）、および**総合演習**を設けた。難しい部分には傍訳を付した。
- 6 巻末付録として「まぎらわしい語の識別」「中世・近世の語法の特徴」「文法用語解説」を収録した。
- 7 見返しに用言・助動詞・助詞・敬語の一覧表を掲げた。

目次

第1章 文語文法入門

1 文語と文語文法	7
1 文語文と口語文の違い	7
2 歴史的仮名遣い	8
2 言葉の単位	9
1 文・文節・単語	9
2 文節の種類	9
3 単語の分類	10
3 品詞	11
確認問題	12

第2章 活用のある自立語(自立語1)

1 用言と活用・用言の種類	13
2 活用形とその主な用法	14
3 動詞	16
1 動詞の活用の種類	16
2 四段活用	17
3 上一段活用	18
4 下一段活用	19
5 上二段活用	20
6 下二段活用	21
確認問題	22
7 カ行変格活用(カ変)	23
8 サ行変格活用(サ変)	24
9 ナ行変格活用(ナ変)	25
10 ラ行変格活用(ラ変)	26

4 補助動詞	27
5 自動詞・他動詞	28
6 動詞の音便	29
確認問題	30

総合演習 1

7 形容詞	31
1 形容詞の活用と種類	32
2 ク活用・シク活用	32
8 形容動詞	33
1 形容動詞の活用と種類	34
2 ナリ活用・タリ活用	34
9 音便と語幹の用法	35
1 形容詞・形容動詞の音便	36
2 形容詞・形容動詞の語幹の用法	37
総合演習 2	38

第3章 助動詞(付属語1)

1 助動詞の性質と分類	39
助動詞の意味による分類	40
2 自発・可能・受身・尊敬の助動詞	42
る・らる	42
3 使役・尊敬の助動詞	44
す・さす・しむ	44
確認問題	45

4 打消の助動詞	46
ず	46
5 過去の助動詞	48
き	48
けり	48
6 完了の助動詞	49
たり	49
り	50
確認問題	50

総合演習 3

7 推量の助動詞	54
む「ん」・むず「んず」	54
らむ「らん」	56
けむ「けん」	56
べし	58
まし	60
らし	60
めり	61
8 伝聞・推定の助動詞	62
なり	62
確認問題	63

総合演習 4

9 打消推量の助動詞	64
じ	64
まじ	64
10 断定の助動詞	66
なり	66
たり	66
11 願望の助動詞	68
まほし	68
たし	68
12 比況の助動詞	68

ごとし 68

奈良時代の助動詞

ゆ・らゆ 70 す 71 ふ 71

助動詞の音便

確認問題 72

総合演習 5

参考 1 助動詞の接続による分類 74
参考 2 助動詞の組み合わせの主な例 75

第4章 助詞(付属語2)

1 助詞の性質と種類	79
2 格助詞	80
が	80
を	82
に	82
へ	83
と	84
より	85
から	85
にて	86
して	87
3 接続助詞	88
ば	89
が	90
に	90
と	92
ども	92
ビ	92
ども	92
もののものをものからものゆゑ	93
確認問題	93
で	94
て	94
つつ	94
ながら	94

総合演習 6

4 副助詞	96
だに	96
すら	96
さへ	96
のみ	98
ばかり	98
まで	98
し	99
など	99
5 係助詞	99
は	100
も	100
ぞ	101
なむ「なん」	101
こそ	101
や(やは)・か(かは)	102
係り結びの法則	104
注意すべき係り結び	104
1 結びの省略	104
2 結びの消去	105
3 「こそ」已然形、「」の逆接用法	105
4 引用文中の係り結び	105
6 終助詞	106
な	106
(な)そ	106
ばや	106
なむ「なん」	107
もが	107
もがな	107
てしが	107
てしがな	107
にしが	107
にしがな	107
か	108
かな	108
な	108
かし	108
7 間投助詞	109
や	109
よ	109
を	109
確認問題	108

奈良時代の助詞

つ	110
ゆ	110
ゆり	110
よ	110
な	110
ね	110
も	111
かも	111
なも	111
もがも(もが)	111
確認問題	112

第5章 活用のない自立語(自立語2)

1 名詞	113
2 副詞	115
1 状態の副詞	115
2 程度の副詞	115
3 呼応の副詞	116
3 連体詞・感動詞	119
1 連体詞の性質と語例	119
2 感動詞の性質と語例	119
4 接続詞	120
1 接続詞の性質	120
2 接続詞の種類	120
総合演習 8	122

第6章 敬語

1 敬語とその種類	123
1 尊敬語	124
2 謙讓語	124
3 丁寧語	125

2 主要敬語の用例 ……128

- 1 尊敬語 ……128
 - たまふ(給ふ・賜ふ) ……128
 - たぶ(賜ぶ) ……128
 - おはす・おはします ……128
 - ます・います ……129
 - のたまふ・のたまはす・おほす(仰す) ……129
 - おほす(思す)・おほしめす(思しめす) ……129
 - きこしめす(聞こしめす) ……130
 - ごらんず(御覧す) ……130
 - たてまつる(奉る) ……130
 - しろしめす(知ろしめす) ……130
 - しらしめす(知らしめす) ……130
 - まゐる(参る) ……131
 - めす(召す) ……131
 - おほとのごもる(大殿籠る) ……131
 - 謙譲語 ……132
 - はべり(侍り) ……132
 - さぶらふ(候ふ・さうらふ(候ふ) ……132
 - つかまつる(仕まつる) ……132
 - つかまつる(仕る) ……132
 - まゐる(参る) ……133
 - まうづ(詣づ) ……133

きこゆ(聞こゆ) ……133

- まかる(罷る)・まかづ(罷づ) ……133
- きこゆ(聞こゆ) ……133
- きこえなす(聞こえなす) ……134
- まうす(申す) ……134
- そうす(奏す) ……134
- けいす(啓す) ……134
- うけたまはる(承る) ……135
- たまはる(賜る・給る) ……135
- たぶ(食ぶ)・たうぶ(食ぶ) ……135
- たまふ(給ふ・賜ふ) ……135
- たてまつる(奉る) ……136
- まゐらす(参らす) ……136
- 3 丁寧語 ……137
 - はべり(侍り) ……137
 - さぶらふ(候ふ・さうらふ(候ふ) ……137
- 特別な敬語表現 ……139
 - 1 二方面に対する敬語 ……139
 - 2 最高敬語(二重敬語) ……140
 - 3 絶対敬語 ……141
 - 4 自尊敬語(自敬表現) ……141
 - 二種類の用法を持つ敬語の判別 ……142
 - 総合演習 9 ……144
- 確認問題 ……138

第7章 文の構造と修辭

- 1 文節相互の関係 ……145
 - 1 主語・述語の関係 ……145
 - 2 修飾・被修飾の関係 ……145
 - 3 並立の関係 ……146
 - 4 独立の関係 ……146
 - 5 補助の関係 ……146
- 2 特殊な構造の文 ……147
 - 1 倒置 ……147
 - 2 省略 ……147
 - 3 挿入 ……147
 - 4 引用 ……147
- 3 文の分類 ……148
 - 1 構造による分類 ……148
 - 2 意味による分類 ……148
- 4 和歌の修辭 ……149
 - 1 枕詞 ……149
 - 2 序詞 ……150
 - 3 掛詞 ……151
 - 4 縁語 ……151
 - 5 体言止め ……152
 - 6 本歌取り ……152
- 主な枕詞・掛詞・縁語 ……153
- 総合演習 10 ……154
- 付録 1 まぎらわしい語の識別 ……155
- 総合演習 11 ……164
- 2 中世・近世の語法の特徴 ……166
- 3 文法用語解説 ……170

第1章 文語文法入門

1 文語と文語文法

現在用いられている言葉を**口語**(現代語)といい、古代から近世(江戸時代)までの言葉を**文語**(古語)という。口語で書かれた文章を**口語文**(現代文)、古語で書かれた文章を**文語文**(古文)という。

言葉の用い方には一定の法則がある。この法則が**文法**であり、口語には**口語文法**、文語には**文語文法**(**古典文法**)がある。

1 文語文と口語文の違い

文語文は、口語文と次のような違いがある。

- 1 歴史的仮名遣いが用いられている。
- 2 主語や助詞の省略が多い。
- 3 口語にはない語や、口語と似ているが意味が違う語がある。
- 4 口語と違う助動詞・助詞が多い。
- 5 「係り結びの法則」など、特別なきまりがある。↓ p. 104

文語文は、**歴史的仮名遣い**で書かれている。歴史的仮名遣いは平安時代中期以前の古典に基準を置いたもので、旧仮名遣いとも呼ばれる。

歴史的仮名遣いに用いられる全ての仮名を整理したものが**五十音図**である。五十音図の縦の並びを行、横の並びを段という。

基礎を押さえよう

文語文と口語文にはさまざまな違いがある。文語文は歴史的仮名遣いで書かれている。

● 五十音図

五十音図は、同じ母音を持つ仮名が横に、同じ子音を持つ仮名が縦に配列されている。

行/段	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
ア行	あ	い	う	え	お
カ行	か	き	く	け	こ
サ行	さ	し	す	せ	そ
タ行	た	ち	つ	て	と
ナ行	な	に	ぬ	ね	の
ハ行	は	ひ	ふ	へ	ほ
マ行	ま	み	む	め	も
ヤ行	や	い	い	い	い
ラ行	ら	り	り	り	り
ワ行	わ	わ	わ	わ	わ

● 母音と子音

母音とは、ア(a)・イ(i)・ウ(u)・エ(e)・オ(o)の五つの音で、それだけで一つのままとまった音になる。

子音とは、母音と結びついて一つのままとった音をつくる、k・t・h・y・r・g・z・pなどの音をいう。

② 歴史的仮名遣い

- ① 語頭以外のハ行「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「ワ・イ・ウ・エ・オ」と発音する。 かはら(川原) ↓カワラ いへ(家) ↓イエ
- ② 「**う**」に続く**連母音**(母音が二つ重なる)は、次のように長音で発音する。
あう (au) ↓オー (o) さうし(草子) (sawsi) ↓ソーシ (sōsi)
いう (iu) ↓ユー (yu) いうげん(幽玄) (iugen) ↓ユーゲン (yūgen)
えう (eu) ↓ヨー (yo) ほんてう(本朝) (honteu) ↓ホンチョー (hontyō)
おう (ou) ↓オー (o) どうじ(童子) (dōji) ↓ドージ (dōji)
- ③ ワ行の「**ゐ**・**ゑ**・**を**」は「イ・エ・オ」と発音する。
ゐる(居る) ↓イル こゑ(声) ↓コエ をとこ(男) ↓オトコ
- ④ 助動詞「む」「むず」「らむ」「けむ」、助詞「なむ」などの「**む**」は「ン」と発音する。 咲かむ ↓サカン
- ⑤ ダ行の「**ぢ**・**づ**」は「ジ・ズ」と発音する。

PLUS

- ① 「**くわ**」「**ぐわ**」は「カ」「ガ」と発音する。
くわし(菓子) ↓カシ ぐわん(願) ↓ガン
- ② 「あふ」「いふ」「えふ」「おふ」は、①により「アウ」「イウ」「エウ」「オウ」となり、さらに②によって長音に発音する。
あふぎ(扇) ↓アウギ ↓オーギ てふ(蝶) ↓テウ ↓チョー

2 言葉の単位

1 文・文節・単語

一つの上まとまった思想や感情を表す一続きの言葉を**文**という。文の終わりに、普通、句点(。)を付ける。

文を、意味がとれて、読んでも不自然でない程度まで小さく区切った最小単位を**文節**という。

今は／昔、／竹取の翁と／いふ／者／ありけり。(竹取物語)

文節をさらに小さく分けた、言葉の最小単位を**単語**という。

今**一**は**一**昔、**一**竹取の翁**一**と**一**いふ**一**者**一**あり**一**けり。

2 文節の種類

① **主語** 「何が」にあたる文節。

② **述語** 「どうする」「どんなだ」「何だ」にあたる文節。

花 咲く。(何が どうする) 山 高し。(何が なんだ)

われは 生徒なり。(何が 何だ)

③ **修飾語** 下の文節にかかって、それを修飾する文節。

連体修飾語 (体言を修飾する文節) 赤き 花 咲く。

連用修飾語 (用言を修飾する文節) 山 高く そびゆ。

※連体修飾語は「どんな」、連用修飾語は「どんなに」。

④ **接続語** 夜更けぬ。されど、行かむ。

⑤ **独立語** あはれ、春も 過ぎぬ。 雪よ、降れ。

PLUS

語頭以外のハ行でも、他の語に付いて複合語になったものは、そのまま発音する。
うきはし(浮橋) ↓ウキハシ
あさひ(朝日) ↓アサヒ

● いろは歌

五十音圖の仮名四十七字を、一度ずつ用いて詠まれた歌謡。平安時代中期頃にできたと考えられ、手習いに用いられた。

いろはにほへと ちりぬるを
わかよたれそ つねならむ
うみのおくやま けふこえて
あさきゆめみし ゑひもせす
色は匂へど 散りぬるを
我が世誰ぞ 常ならむ
有為の奥山 今日越えて
浅き夢見じ 酔ひもせず

花の色は美しいけれど、すぐに散り果ててしまう。人の世も同じで、誰がいつまでも変わらないうられようか。このように移ろいやすいこの世の煩惱を乗り越えて、はかない夢にふけったり、酔いしれたりするようなことはすまい。

今となつては昔のことだが、竹取の翁という者がいた。

PLUS

二つ以上連続した文節が結びついて、意味や働きの上でまとまりをつくることのできるものを**連文節**という。

今は昔、／竹取の翁と いふ 者／ありけり。

● 被修飾語

修飾される文節。「赤き花」「高くそびゆ。」「花」「そびゆ」が被修飾語である。

● 体言・用言

↓ p. 10

● 接続語

前後の文や文節をつなぐ文節。夜が更けてしまった。しかし、行こう。

● 独立語

他の文節との関係が薄く、独立して用いられる文節。ああ、春も過ぎてしまった。雪よ、降れ。

③ 単語の分類

自立語と付属語

単独で文節になることができ、文や文節の初めにくることのできる単語を**自立語**という。単独では文節になることができず、常に自立語の下に付属して用いられる単語を**付属語**という。

今一は**一**昔、**一**竹取の翁**一**と**一**いふ**一**者**一**あり**一**けり。

〈自立語〉今・昔・竹取の翁・いふ・者・あり

〈付属語〉は・と・けり

自立語 付属語

体言と用言

「自立語の中の「今」「昔」「者」は、実体を表す語で、語形が変わらず、単独で主語になることができる。このような単語(名詞)を、**体言**という。

自立語の中の「いふ」「あり」は、「いは(ず)」「いひ(たり)」「いふ(者)」「あら(ず)」「あり(けり)」「ある(所)」のように、語形が変化する。語形が規則的に変化することを**活用**という。活用があつて、単独で述語になることができる単語(動詞・形容詞・形容動詞)を**用言**という。

活用のある単語を**活用語**という。付属語の「は」「と」は活用がない単語だが、「けり」は活用語である。「は」「と」は助詞、「けり」は助動詞。

文章構成図



●自立語と付属語
自立語と付属語は次のようにして見分けることができる。
文節に分ける(一)。↓単語に分ける(二)。
今一は**一**昔、**一**竹取の翁**一**と**一**いふ**一**者**一**あり**一**けり。
自付 自付 自付 自付 自付 自付 自付 自付
あり一けり。 (自||自立語 付||付属語)

・各文節の最初の単語が自立語。
・文節内の、自立語の下に続く単語は付属語。

一文節中に付属語がいくつかある場合も、ひとつもない場合もある。

ていつて詳しく

接頭語と接尾語

それだけでは単語には数えられないが、単語の上か下に付いて一単語をつくるものを**接尾語**という。下に付くものを**接頭語**という。

〈接頭語〉み吉野 もの悲し うち見る
〈接尾語〉なんぢら 侍ども 時めく

③ 品詞

単語は、次のような文法上の性質に従って**十種類の品詞**に分類される。

- ① 自立語か、付属語か。
- ② 活用する語か、活用しない語か。
- ③ 主語・述語・修飾語・接続語・独立語のどれになる語か。

●単語の品詞が変わることを**品詞の転成**という。
祈る(動詞) ↓ 祈り(名詞)
あり(動詞) ↓ 或る(連体詞)
●文を単語に分け、単語一つ一つの品詞を明らかにしていくことを**品詞分解**という。

品詞分類表

自立語か 付属語か	活用するか 活用しないか	単独でどのような文節になるか	品詞	語例
自立語	活用しない語	主語になる語(体言)	動詞	言ふ 見る
			形容詞	なし
			形容動詞	静かなり 堂々たり
			名詞	山 花 家
			連体詞	あらゆる いはゆる
			副詞	いと やがて
			接続詞	されど しかるに
			感動詞	いざ あな
			助動詞	ず けり
			助詞	が ば の
付属語	活用する語	主語にならない語	動詞	
			形容詞	
			形容動詞	
			名詞	
			連体詞	
			副詞	
			接続詞	
			感動詞	
			助動詞	
			助詞	
付属語	活用しない語	主語にならない語	動詞	
			形容詞	
			形容動詞	
			名詞	
			連体詞	
			副詞	
			接続詞	
			感動詞	
			助動詞	
			助詞	

確認

1 次の語の読み方を現代仮名遣いで記せ。

- ① にほひ(匂ひ) ② いへぢ(家路)
 ③ をのこ(男子) ④ かはづ(蛙)
 ⑤ ひとごゑ(人声)
 ⑥ まうす(申す)
 ⑦ みなか(田舎) ⑧ にようくわん(女官)
 ⑨ けふ(今日) ⑩ あうむ(鳥の名)

2 次の傍線部を、全て平仮名の現代仮名遣いで記せ。

- ① いたうつくしうてゐたり。
とてもかわいらしい姿で座っている
竹取物語
- ② 世の中の人が飢ゑず、寒からぬやうに、
世の中の人が飢えることなく
(徒然草)
- ③ ある人のいはく、年五十になるまでじやうずに至らざ
言うことには
上手に達しないような芸
(徒然草)

3 次の文を／で文節に分けよ。

- ① すさまじと言ふはおろかなり。
興ざめたと言つても言い足りない
(枕草子)
- ② 翁、竹を取ること久しくなりぬ。
翁は、竹を取ることが長く続いた
(竹取物語)
- ③ かきつばたいとおもしろく咲きたり。
かきつばたがたいそう趣深く咲いている
(伊勢物語)

4 3の文を／で単語に分けよ。

- ① すさまじと言ふはおろかなり。
 ② 翁、竹を取ること久しくなりぬ。
 ③ かきつばたいとおもしろく咲きたり。

5 傍線部の文節の種類を後から選び、記号で答えよ。

- ① 僧たち、宵のつれづれに、「いざ、かいもちひせむ。」
手持ちぶたに さあ はた餅を作ろう
 と④言ひけるを、
(宇治拾遺物語)

ア 主語 イ 述語 ウ 修飾語

エ 接続語 オ 独立語

6 4で単語に分けた②について、単語を自立語と付属語に分けよ。

- ② 翁、竹を取ること久しくなりぬ。

7 次の説明に当てはまる品詞名を後から選び、記号で答えよ。

- ① 付属語で活用する単語。
 ② 自立語で活用せず、主語となる単語。
 ③ 自立語で活用し、言い切りの形が「し」で終わる単語。
 ④ 自立語で活用せず、用言を修飾する単語。
 ⑤ 付属語で活用しない単語。
 ⑥ 自立語で活用し、言い切りの形が「なり」「たり」で終わる単語。
 ⑦ 自立語で活用し、言い切りの形が「ウ段」または「り」で終わる単語。

ア 動詞 イ 形容詞 ウ 形容動詞 エ 名詞

オ 副詞 カ 連体詞 キ 接続詞 ク 感動詞

ケ 助動詞 コ 助詞